

くらし

自由帳



ストーリーガーデンでテレビ電話を通して全国の会員と意見を交わすマティアス谷本リサさん(左端)たち。＝京都市山科区

「おうち英語」で自信育む

来年度から小学校での英語教育が本格的に始まる。中学や高校でも英語だけで話す授業の導入など、より実践的な学びとなる。子どもたちに国際化を生き抜く語学力を身に付けさせようという狙いだが、英語によ

幼少期から親子で学習

るコミュニケーション能力を学校現場のみで高めるには限界もある。そうした中、幼少期から家庭で慣れさせる学習法が広がっている。ポイントは自然と英語に触れる環境づくりという。

「つてくれば」と谷本さんは言う。

こうした取り組みは「おうち英語」と呼ばれる。近年はネット環境の充実に伴い、母親たちが地域を超えてコミュニケーションをつくり、家庭で気軽に使える英語教材などについて情報交換するケースが目立っている。

さんは出産をきっかけに、興味のあった英語を子どもと一緒に楽しみながら学ぼうと一念発起した。おむつの交換や食事の際などの声掛けを英語で行い、子どもが小学校に進学すると、オンラインの英会話教室も取り入れた。

3人の子は自然に英語を口にするようになった。ただ習得の速さはそれぞれで、次男は読み書きが苦手という傾向が浮かんできた。友人の母親に相談してテキストを選び、長文を読み込ませるのではなく、聞いて理解する学習法を採用。単語はいくつかのパーツに分けて、さんが背中になぞる工夫を凝らし、文字通り体で覚えさせた。

次男は中学1年で大学中級程度とされる英検準1級に合格するなど上達。単語の誤記は今もあるが「家でやっていたよかった。周囲のアドバイスも助かった」と振り返る。

日本の英語教育は、単語や熟語を覚えて長い文章を読み解き、文法通りに表現するという受験対策に重きが置かれてきた。しかし英語の点数が良くて、日常的に使いこなせないといった課題も指摘されている。

谷本さんは「私たちの目的は英検に受かることではないし、英語がペラペラに話せることが偉いわけでもない」と強調する。重視するのは英語

変わる英語教育 新しい学習指導要領に基づいて小学校では2020年度から、5、6年生で学ぶ外国語活動(英語の聞く、話す)を3、4年生から学習するようになり、5、6年生の英語授業は「読む、書く」も加わって正式教科となる。中学、高校では英語を使って考えを伝えたり、表現したりする学習が増える。大学入試センター試験の後継として20年度から始まる大学入学共通テストは「聞く・読む・話す・書く」の4技能を問うため民間検定試験を活用、23年度までは従来型のマーク式試験と併存させ24年度からは民間試験に一本化する予定。

谷本さんの中学2年の長男は特別支援学校に在籍し、偏食でルールへのこだわりが強い。育児も一筋縄ではいかなかったが、幼いころから家庭で英語を学ばせる中で、谷本さんは多くの能力を平均的に伸ばすのではなく、できる部分を伸ばす教育の必要性を感じた。

長男は学校で級友たちと比べて「できないこと」に苦しんでいた。しかし長く親しんできた英語は「できること」。そのことは長男にとって確かな自信につながっているという。

谷本さんたちは、家庭で英語を学ばせてきたことで語学力以上の「効果を実感した。それは、子どもと日々接し、つぶさに観察してきたからこそ、その気づき。さらには、子どもの力を伸ばすため親として「何ができるのか」を一緒に考えようとする意識だ。

英語のコミュニケーション能力は短期間で身に付くものではない。「聞く・話す・読む・書く」。学校での学びを前にどんな準備をし、将来につながるのか。家庭での学習について谷本さんは言う。「誰かとの比較ではない。子どもに合ったやり方がきっとあるはずだ」

(四宮淳平)